

通信制高校教師の生徒対応困難感に関する検討

Difficulties About Correspondence To Students At Correspondence Course High School

原 健太郎 (Kentaro Hara) 指導：菅野 純

【1. 研究の目的】通信制高校教育は勤労青年の教育の場として設立され、学ぶ機会を逸していた人々に教育の機会を保障するために始まった（上野, 2009）。しかし近年通信制高校に在籍する生徒には（1）学力不足で全日制高校に入れない、（2）不登校問題を抱えている、（3）全日制高校を中退した、などの経験をしているものが多くなってきている（文部科学省, 2011）。浄住・川津・小屋野（2001）は、高校教師にとって負担が最も大きい仕事が「生徒指導」であることを示しており、その理由として不登校生徒への対応などを挙げている。このことから、多くの不登校生徒の対応が求められる通信制高校教師は強い負担感をもっていることが予想される。これまでの通信制高校に関する研究では、教師に焦点を当てた研究例は少なく、通信制高校教師に特有の生徒対応の難しさは明らかにされてきていないといえる。本研究では通信制高校教師が生徒対応の際にどのような困難感を持ち、対処しているのかを明らかにすることを目的とする。

【2. 方法】（1）調査手続き：『2011～12年版全校通信制高校案内』（学研教育出版, 2011）、通信制高校ナビ（株式会社クリスク, 2011）を参考に39校の通信制高校に研究目的と調査の概略を電話で説明し、質問紙送付許可の得られた高校に質問紙と返送用封筒を送付した。分析対象は回答のあった公立高校5校、私立高校12校の計17校である。公立高校56部、私立高校81部の返送があり、合計137部の回答が得られた。回収率は25.37%であった。（2）調査項目：対応が難しいと感じる生徒（選択）、生徒対応で困った経験（自由記述）、生徒対応で困った際の取り組み（選択、自由記述）、良かったと感じた取り組み（選択）、生徒対応で困った際に望むサポート（自由記述）などについて調査を行った。（3）分析方法：選択式項目の分析は公立校・私立校ごとに回答者数と割合を算出した。自由記述式項目の分析は川喜田（1967）のKJ法を参考に行った。

【3. 結果と考察】通信制高校教師が生徒対応に困難を感じることとして、13の大カテゴリーに分類した（Table）。以下、大カテゴリーを《》，中カテゴリーを〔 〕で示す。

《対人場面》における〔他者の感情理解や配慮が足りない生徒への対応〕について、ソーシャルスキルの授業を行うなどの対応が考えられる。しかし他者理解の苦しさの背景には発達障がいがあることも考えられるため、教師は障がい特性など個々の生徒の特徴を踏まえ、チームティーチングなど個別指導ができる体制を用意する必要があると考えられる。《学習指導・学力評価》における〔卒業要件を満たすことができない生徒への対応〕では、「低学力で単位の取得の見込みはないのに在籍させておく不幸」という教師の言葉のように、教師の葛藤が伺えた。《多様な生徒の存在》にみられるように、通信制高校には不登校、発達障がい、精神疾患など多様な生徒が在籍しているため、教師はクラス全体をどのように指導していくのが難しいと感じていることが明らかとなった。

本研究によりこれまで検討されてこなかった通信制高校教師が抱える生徒対応への困難感が明らかになり今後通信制高校という特性を踏まえた上で教師の支援を検討する際に、有益な知見になったと考えられる。今後の課題として教師の困難感や対応が生徒に与えている影響や、教師が抱えている葛藤など、困難感の詳細が不明であることが挙げられる。詳細な教師の困難感の調査を重ね、今後の通信制高校教育のあり方を検討する必要がある。

Table 生徒対応に困難を感じた経験について（N=191）

大カテゴリー	N	(%)
対人場面	45	(23.56)
学習指導・学力評価	34	(17.80)
家庭環境・保護者	23	(12.04)
不登校生徒の対応	22	(11.52)
非行傾向・不従順	20	(10.47)
精神疾患等の生徒の対応	14	(7.33)
多様な生徒の存在	13	(6.81)
進路指導	8	(4.19)
生活指導	4	(2.09)
学校での対応が難しい生徒からの相談	3	(1.57)
発達障がいをもつ生徒への対応の不安感	2	(1.05)
教員間での指導方針のずれ	1	(0.52)
通信制高校の学力的位置付け	1	(0.52)